ロールシャッハテストの警戒心過剰指標と統合型 HTP の関連について

The association between the Rorschach Hypervigilance Index and the synthetic house-tree-person drawings

浅　野　　正*
Tadashi ASANO

要旨：臨床心理アセスメントの実践の中で、複数の心理検査を組み合わせて実施するテストバッテリーが重視される。包括システムによるロールシャッハテストの警戒心過剰指標と、統合型 HTP の描画特徴との関連を調べることが、本研究の目的であった。精神病院での 43 名の患者を調査対象とし、統合型 HTP の統合性や遠近感などの評定項目について、警戒心過剰指標が陽性か陰性かによる人数差を、χ^2 検定により検討した。その結果、ロールシャッハテストの警戒心過剰指標が陽性である対象者ほど、統合型 HTP で羅列的な描画は少なく、遠近感や奥行きを表現しながら、全体を統合して絵を描く傾向が表れた。不安定な愛着関係から、周囲に対する警戒心や疑い深さが増し、自分と他者との関係を意識しすぎることが、統合型 HTP の描画特徴に反映されていると考えられた。

キーワード：ロールシャッハテスト、統合型 HTP、警戒心過剰指標、心理アセスメント、テストバッテリー

Ⅰ　問題と目的

臨床心理士による心理アセスメントの実践で、複数の心理検査を施行することは一般的であるが、心理検査の組み合わせ方は様々である。質問紙法と投映法を併せて実施する場合、質問紙法は測定する性格要因が明確なので、同じ特徴が投映法に表れているかどうかは、比較的分かりやすい。一方で、2 つの投映法を実施すると、どちらの検査も 1 つのサインに複数の性格要因が重なって表れるため、2 つの投映法が共通した傾向を示しているか否かということさえ分からないこともある。このことが、異なる投映法を併せて行うテストバッテリーにおいて、対象者の性格理解を難しくする 1 つの要因だといえる。

*　あさの ただし　文教大学人間科学部

本研究で取り上げる、ロールシャッハテストと統合型 HTP の関係についても、それが当てはまる。統合型 HTP とは、一枚の画用紙に家と木と人を描いてもらう描画テストである。家には対象者の持つ家族イメージが、木には無意識的な自己像、人には意識的な自己像が表れるとされる。3 つのアイテムを付加物も含めて構成的に描くことから、統合型 HTP には対象者から見えている環境と、その中で生きる自分の姿が映し出されやすいといわれている。一方で、包括システムによるロールシャッハテストでは、相当な数の変数がそれぞれの持つ心理的意味に応じて、思考や認知のグループ、感情のグループ、統制のグループ、自己・対人知覚のグループなどに分かれて整理されている。上記の統合型 HTP の性質を考えれば、統合型 HTP はロールシャッハテストの自己・対人知覚と関連すると思われるが、実証研究によって確認されているわけではない。心理アセスメントの実践において、ロールシャッハテストと統合型 HTP を実施しても、どこを手掛かりにして 2 つを比較検討すればよいかが分からないというのが現状である。

ロールシャッハテストの対人知覚の中で、解釈上重要な位置を占める警戒心過剰指標（Hypervigilance Index：HVI）を、本研究では取り上げる。警戒心過剰指標は、150 名の妄想型統合失調症者と 20 名の妄想型人格障害患者のデータを基にして作成されたものであり、この標本では高い割合で警戒心過剰指標が陽性となる。しかし、必ずしも統合失調症や人格障害でなくてもこの指標が陽性となることは多く、警戒心過剰指標が陽性の者は、パーソナリティ傾向として、自分を環境の犠牲者とみなしやすく、いつも油断なく身構えていなければならない人と解される。環境に確かな手掛かりがなくても悲観的な捉え方をしがちであり、他者と親しい関係を作れない。警戒心過剰指標は得点ではなく、陽性か陰性かの二者択一で判断される。濃淡材質反応（Texture）があれば、警戒心過剰指標は陰性になる。濃淡材質反応がなくて、以下の 7 つの下位項目のうち 4 つ以上が該当すれば、警戒心過剰指標は陽性とされる（Exner，1991/1994）。

1．Zf＞12
2．Zd＞+3.5
3．S＞3
4．H+(H) +Hd+(Hd)＞6
5．(H)+(A)+(Hd)+(Ad)＞3
6．H+A：Hd+Ad＜4:1
7．Cg＞3

対人知覚の 1 つの在り方を示すロールシャッハテストの警戒心過剰指標と、自他関係が表れやすいとされる統合型 HTP の描画特徴とがどのように関連するかを調べることが、本研究の目的である。その結果は、臨床心理実践でのテストバッテリーにおいて、ロールシャッハテストと統合型 HTP とを比較検討する際の手掛かりとなり、対象者の心理アセスメントに資するものと期待できる。

Ⅱ　方　法

1．調査対象

心理アセスメントのテストバッテリーとして統合型 HTP とロールシャッハテストを実施した

精神病院での43名の患者を調査対象とした（平均年齢33.3歳，男性20名，女性23名）。43名の主訴は様々である。ただし、その中でうつ病が主診断であるか，診断にうつ病は含まれないが，抑うつ症状が認められた患者が18名だった。なお、43名の中に統合失調症患者は含まれていない。

２．評定項目と分析方法

統合型HTPの評定項目は、三上（1995）によって呈示された全体評価と、家・人・木評価を網羅する149項目の中で、全体評価のうち「統合性」、「遠近感」、「サイズ」、「付加物」、人物評価のうち「人の向き」、「運動描写」（下位項目にして29項目）を、本研究での分析項目とした。統合性と遠近感については、より詳細に分析するため、統合性については、「羅列的」と「やや羅列的」を加えたものを「羅列計1」、「羅列的」と「やや羅列的」と「媒介による統合」を加えたものを「羅列計2」として、新たな2項目を追加した。また遠近感については、「ばらばら」と「直線（重なりなし）」と「直線（重なりあり）」を加えたものを「ばらばら計1」、「ばらばら」と「直線（重なりなし）」と「直線（重なりあり）」と「ややあり」を加えたものを「ばらばら計2」として、新たな2項目を追加した。

ロールシャッハテストの警戒心過剰指標については、濃淡材質反応がなくて、7つの下位項目のうち4つ以上が該当している場合に陽性とした。警戒心過剰指標の全体での評価の他、下位項目ごとの分析も行った。統合型HTPの評定は評定者2名で行い、評定が異なった場合は協議を行い確定した。包括システムによるロールシャッハテストのコーディングについても、同様の手続きを取った。

統合型HTPの各評定項目について、警戒心過剰指標、およびその下位項目の該当、非該当による人数差を、χ^2検定により検討した。期待度数が5以下の場合は、直接確率検定を適用した。

Ⅲ　結　果

統合型HTPの評定項目ごとの、警戒心過剰指標、およびその下位項目の該当者と非該当者の人数比較を、表1に示した。警戒心過剰指標の該当者に有意に多くみられたのは、「遠近感・中」（$\chi^2 = 7.402, p<.05$）であった。逆に有意に少なかったのは、「統合性・羅列計2」（$\chi^2 = 5.824, p<.05$）「遠近感・ばらばら計1」（$\chi^2 = 5.464, p<.05$）であった。

また、警戒心過剰指標該当者に少ない傾向がみられたのは、「統合性・羅列的」（$\chi^2 = 3.119, p<.10$）、「遠近感・ばらばら計2」（$\chi^2 = 3.452, p<.10$）であった。「サイズ」、「付加物」、「人の向き」、「運動描写」に有意差または有意傾向は認められなかった。

警戒心過剰指標の第一下位項目の該当者に有意に多くみられたのは、「遠近感・中」（$\chi^2 = 6.894, p<.01$）であった。逆に有意に少なかったのは、「統合性・羅列的」（$\chi^2 = 5.882, p<.05$）、「統合性・羅列計1」（$\chi^2 = 3.909, p<.05$）、「遠近感・ばらばら計1」（$\chi^2 = 5.225, p<.05$）、「運動描写・直立不動」（$\chi^2 = 4.560, p<.05$）であった。

また、警戒心過剰指標の第一下位項目の該当者に多い傾向がみられたのは、「統合性・やや統合的」（$\chi^2 = 2.751, p<.10$）であった。逆に少ない傾向がみられたのは、「統合性・羅列計2」（$\chi^2 = 2.978, p<.10$）、「遠近感・直線（重なりなし）」（$\chi^2 = 3.376, p<.10$）であった。

表１　統合型 HTP の評定項目ごとの、警戒心過剰指標およびその下位項目の該当者と非該当者の人数比較

評定項目		全体 (n＝43)	HVI 総計		HVI 第１項目		HVI 第２項目		HVI 第３項目		HVI 第４項目		HVI 第５項目		HVI 第６項目		HVI 第７項目	
			該当 (n＝15)	非該当 (n＝28)	該当 (n＝22)	非該当 (n＝21)	該当 (n＝7)	非該当 (n＝36)	該当 (n＝14)	非該当 (n＝29)	該当 (n＝21)	非該当 (n＝22)	該当 (n＝14)	非該当 (n＝29)	該当 (n＝31)	非該当 (n＝12)	該当 (n＝3)	非該当 (n＝40)
統合性	羅列的　a	13	2	11†	3	10*	0	13†	2	11	5	8	5	8	10	3	0	13
	やや羅列的　b	7	3	4	4	3	2	5	3	4	3	4	2	5	5	2	1	6
	媒介による統合　c	5	0	5	3	2	1	4	0	5	2	3	0	5	2	3	0	5
	やや統合的	11	6	5	8	3†	3	8	4	7	7	4	4	7	7	4	1	10
	明らかに統合的	7	4	3	4	3	1	6	5	2*	4	3	3	4	7	0	1	6
	羅列計１（a+b）	20	5	15	7	13*	2	18	5	15	8	12	7	13	15	5	1	19
	羅列計２（a+b+c）	25	5	20*	10	15†	3	22	5	20*	10	15	7	18	17	8	1	24
遠近感	ばらばら　a	7	1	6	3	4	1	6	1	6	3	4	1	6	4	3	1	6
	直線（重なりなし）b	11	2	9	3	8†	2	9	2	9	4	7	4	7	9	2	0	11
	直線（重なりあり）c	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	1	0	0	1
	ややあり　d	9	4	5	3	6	2	7	3	6	5	4	4	5	7	2	1	8
	中	12	8	4*	10	2**	2	10	7	5*	8	4	5	7	7	5	1	11
	大	3	0	3	0	3	0	3	1	2	1	2	0	3	3	0	0	3
	ばらばら計１（a+b+c）	19	3	16*	6	13*	3	16	3	16*	7	12	5	14	14	5	1	18
	ばらばら計２（a+b+c+d）	28	7	21†	12	16	5	23	6	22*	12	16	9	19	21	7	2	26
サイズ	全体で 1/4 以下	7	1	6	3	4	0	7	2	5	3	4	0	7†	5	2	0	7
	HTP のみで 1/4 以下	8	1	7	3	5	0	8	2	6	4	4	1	7	5	3	0	8
付加物	付加物あり	19	8	11	11	8	3	16	7	12	11	8	6	13	13	6	2	17
	付加物なし	24	7	17	11	13	4	20	7	17	10	14	8	16	18	6	1	23
人の向き	正面向き	20	7	13	10	10	2	18	7	13	12	8	7	13	12	8†	2	18
	横向き	9	3	6	4	5	2	7	3	6	3	6	3	6	8	1	1	8
	後ろ向き	4	1	3	2	2	1	3	1	3	2	2	2	2	3	1	0	4
	混合	1	0	1	1	0	0	1	0	1	1	0	0	1	0	1	0	1
	判別不能	9	4	5	5	4	2	7	3	6	3	6	2	7	8	1	0	9
運動描写	手が横	3	2	1	3	0	0	3	2	1	3	0	2	1	2	1	1	2
	直立不動	12	3	9	3	9*	1	11	2	10	5	7	4	8	9	3	0	12
	簡単な運動	10	5	5	6	4	2	8	6	4†	6	4	4	6	7	3	2	8
	明瞭な運動	6	2	4	4	2	3	3*	1	5	4	2	1	5	5	1	0	6
	判別不能	10	3	7	6	4	1	9	3	7	4	6	2	8	6	4	0	10

$^{**}p<.01$，$^{*}p<.05$，$^{\dagger}p<.10$

警戒心過剰指標の第二下位項目の該当者に有意に多くみられたのは、「運動描写・明瞭な運動」（$\chi^2 = 5.818, p<.05$）であった。

また、警戒心過剰指標の第二下位項目の該当者に少ない傾向がみられたのは、「統合性・羅列的」（$\chi^2 = 3.623, p<.10$）であった。

警戒心過剰指標の第三下位項目の該当者に有意に多くみられたのは、「統合性・明らかに統合的」（$\chi^2 = 5.753, p<.05$）、「遠近感・中」（$\chi^2 = 5.036, p<.05$）であった。逆に有意に少なかったのは、「統合性・羅列計 2」（$\chi^2 = 4.289, p<.05$）、「遠近感・ばらばら計 1」（$\chi^2 = 4.359, p<.05$）、「遠近感・ばらばら計 2」（$\chi^2 = 4.528, p<.05$）であった。

また、警戒心過剰指標の第三下位項目の該当者に多い傾向がみられたのは、「運動描写・簡単な運動」（$\chi^2 = 4.469, p<.10$）であった。

警戒心過剰指標の第四下位項目には、有意差および有意傾向は認められなかった。

警戒心過剰指標の第五下位項目の該当者に少ない傾向がみられたのは、「サイズ・全体で 1/4 以下」（$\chi^2 = 4.036, p<.10$）であった。

警戒心過剰指標の第六下位項目の該当者に少ない傾向がみられたのは、「人の向き・正面向き」（$\chi^2 = 2.718, p<.10$）であった。

警戒心過剰指標の第七下位項目には、有意差および有意傾向は認められなかった。

Ⅳ　考　察

本研究では、ロールシャッハテストの警戒心過剰指標と、統合型 HTP の描画特徴との関連を調べた。その結果、ロールシャッハテストの警戒心過剰指標が該当する対象者ほど、統合型 HTP の中の 3 つのアイテムを羅列的に描くことが少なく、全体を統合して絵を描く傾向が表れた。また、二次元的で平板な描画は少なく、遠近感や奥行きを適度に表現していた。同様の傾向は、警戒心過剰指標の第一下位項目と第三下位項目でも確認された。人物に関しては、警戒心過剰指標の総計には特徴は表れなかったが、複数の下位項目から、有意水準に至ったものと有意傾向にとどまったものとを併せてみると、警戒心過剰指標の下位項目が該当する対象者ほど、正面向きで直立不動の人物が少なく、何らかの運動を伴った人物描写をする傾向が示唆された。また有意差には至らなかったが、第五下位項目が該当する者ほど、小さなサイズの描画が少なかった。

統合型 HTP の統合性について、三沢（2008）は、小学校前半の“観念画期”と後半の“写実画期”を対比させながら、次のように説明している。すなわち、「思ったままを描く」観念画期は、自己中心的な心性に基づいており、客観的な大きさを考慮せず、家や樹木と比較して自分を表す人物を大きく描く傾向がある。また、擬人化された樹木や、人間のように縦長の家が描かれることも多い。しかし、小学校後半頃の「見えたままを描く」写実画期になると、外界を客観的に観察できるようになる。自分と外界との関係を客観的に把握し、社会の中にいる自分を意識できるようになる。こうした発達的変化が統合型 HTP に反映されると、描画は全体として統合的となり、家と人と木の大きさのバランスは現実に即したものとなり、3 つのアイテムの配置や関係付けもよく考えられたものとなる。

アイテムの関係付けを客観的な現実に即して行っている統合性の高い描画は、同時に三次元的で奥行きのある描画になりやすい。HTP 法を開発した Buck（1948/1982）は、遠近感の使い方

には、対象者と環境との相互作用、対象者の人間関係の持ち方、対象者の人間関係に対する態度、感情、理解力などが表れると説明している。この説明は、三沢による統合性の説明と類似している。Buck は家と木と人を別々の用紙に描くという方法を取っていたため、複数のアイテムの統合という観点からの説明ではないが、統合性と遠近感が示す心理的内容は近いと思われる。人物の運動に関しても、統合型 HTP では、人物を家や木との関連において描くため、一枚の画用紙に人だけを描く場合よりも運動が伴いやすい（三上，1995）。全体を統合して描かれた絵ほど、運動を伴った人物描写がされやすいといえる。

一方で、ロールシャッハテストの警戒心過剰指標について、Weiner（1998/2005）は次のような説明をしている。

> 「（警戒心過剰指標）は、人々との親密な対人関係を挫折し、警戒の目で見、それを避けて他者から距離をとろうとし、注意深く個人領域の境界を守ったり、プライバシーを守ろうと努力するような外界へのアプローチと関連する。さらに過警戒の人は世界を危険なもの、他者は表裏があるとみなすので、どんなかかわり合いの前にも用心し、しばしば疑い深く人々や状況に接近し値踏みする。通常彼らは、自分の身を守る必要性に捉われ、たいてい用心深く、ほとんど危険を冒さず、自分の思考や感情の大部分を秘密にして生活を送る。」（Weiner，1998/2005，p208）

警戒心過剰指標の下位項目について、Weiner の説明によれば、本研究で統合性および遠近感との関連が表れた第一下位項目（Zf>12）は、事象間のお互いの関連付けへの注視や、何かないかと周囲事情を注意深く探し出そうとする態度を反映している。また、第三下位項目（S>3）でＳとコード化されるロールシャッハテストの空白反応は、基底にある怒りや憤りを意味している。それが他者に投影される時その人を信用できなくなり、他者が自分に悪意を持ち脅威を与える存在として知覚されるようになり、他者から距離を置く過警戒の態度を強めることとなる。

それでは、ロールシャッハテストの警戒心過剰指標が陽性である者ほど、統合型 HTP では統合的で遠近感のある絵を描きやすいという本研究の結果をどのように考えればよいだろうか？重要なことは、警戒心過剰指標は、他者との安定した愛着関係を示す濃淡材質反応（Texture）がロールシャッハテストの反応として出現していれば、たとえ下位項目が４つ以上該当していても陰性となる点である。言い換えれば、ロールシャッハテストに濃淡材質反応があり、安定した愛着関係を築けると考えられる人が、警戒心過剰指標が陽性になることはない。すなわち、Weiner が警戒心過剰指標の説明の冒頭で挙げている、人々との親密な対人関係の挫折が警戒心過剰指標で示される性格傾向の原点となっている。そしてそのことが、世界を危険なものと感じる用心深さや、他者は表裏があるとみなす疑い深さ、自分を守るために他者から慎重に距離を置く態度を生んでいる。

三沢の説明では、小学校前半から後半にかけて、「思ったままを描く」観念画期から、「見えたままを描く」写実画期への発達的変化がある。もし「見えたままを描く」段階に達してはいるが、親密な対人関係の挫折を体験している者がいたとすると、その人達が描く統合型 HTP はどのようなものになるだろうか？自分と外界との関係を客観的に把握し、社会の中にいる自分を意識できることから、描画は統合的かつ遠近感のあるものとなるであろう。同時に、愛着関係の失敗から来る対人関係の不安定さから、自他の関係を過剰に考えすぎて、世界を危険なものと行き

過ぎた心配をしたり、他者は表裏があると疑い深くなり、そのことでも描画は統合的かつ遠近感のあるものとなるかもしれない。つまり、警戒心過剰指標が陽性の人は、自分と外界との関係性を客観的に把握するという程度ではなくなり、自他関係への意識を過剰に強めすぎるということである。しかし、危害を恐れて用心深く備えたり、他者は悪意を抱いているのではと疑心暗鬼になるのは、もはや客観的な現実とはずれてきている。その意味で、警戒心過剰指標が陽性である者の描く統合型 HTP は、統合的かつ遠近感のあるものであっても、客観的な現実把握には失敗しており、「見過ぎて、見えたままが描けなくなっている」描画が含まれているかもしれない。

今後は、警戒心過剰指標の陽性者が描いた統合型 HTP の中で、特に全体を統合して遠近感も見られる描画について、過警戒の性格特徴が描画の中にどのようなサインとして表れているかを調べる研究が求められる。この場合、描画を一枚ずつ質的に分析する方法が適切と思われる。統合的かつ遠近感はあるが、樹木の枝の上に家があるとか、家の中に犬小屋があるなど、何からの非現実的な内容が含まれることが予想される。すでに説明したように、警戒心過剰指標は、妄想型統合失調症者と妄想型人格障害患者のデータを基にして作成されており、非現実的な描画内容には、過警戒の他、妄想的な性格傾向が表れるという可能性も考えられる。

文献

Exner, J. E.（1991）. *The Rorschach: A comprehensive system: Vol.2. Interpretation*（*2nd ed.*）. New York: Wiley. 藤岡淳子・中村紀子・佐藤豊・寺村堅志（訳）（1994）. エクスナー法　ロールシャッハ解釈の基礎. 岩崎学術出版社.

Buck, J. N.（1948）. The H-T-P technique: A qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical Psychology*, Monograph Supplement No.5, Brandon, Vermont. 加藤孝正・萩野恒一（訳）（1982）. HTP 診断法. 新曜社.

三上直子（1995）. S-HTP 法 ── 統合型 HTP 法の臨床的・発達的アプローチ. 誠信書房.

三沢直子（2008）. 描画テスト（S-HTP）に表れた子どもの発達の問題. 臨床描画研究, 23, 64-81.

Weiner,I.B.（1998）. *Principles of Rorschach interpretation.* New Jersey：Lawrence Erlbaum Associates. 秋谷たつ子・秋本倫子（訳）（2005）. ロールシャッハ解釈の諸原則. みすず書房.